

「ゲイ、レズビアンから見た医療と福祉の倫理」についてのレポート

今崎牧生

権さん、わかりやすいパワーポイントと解説、ありがとうございました。

山瀬さん、まおさん、ビッグサプライズが微笑ましく、幸せを届けて頂きました。

インターネット受講だったので画面が PP のままで、重大発表の時のお二人の表情やしぐさがお見受けできなかったのが、とても残念でした。

お三人ともお顔を出されての講義、その勇氣にも心を打たれるものがありました。ありがとうございました。

~~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*

以下、自分自身も医療従事者なので、LGBTの方々の医療機関へのアクセスについての考察を試みる。(Medicolorよりセクシャルマイノリティと医療のパンフレットの参照とした。)

もっとも切なく印象に残ったのは救急及び死に向かう時のお話だった。1つのユニットとして愛情を育み、生活を営んでいても、法的に認められなければ必要な書類も書けず、最も大切な時間に一緒に居られない場合もある。

医療従事者も法に従わなくてはならないので出来る配慮は限られる。面会などであれば、なんとか出来るかもしれない。問題はLGBTに気付けるかどうかである。あるいは、その事を伝え易い場所・時間・雰囲気を提供出来るか。

一般に病院という所は、プライバシーを尊重する事が少ない所だ。婦人科や産科、メンタルヘルス、泌尿器科といった分野ではプライバシーの尊重に物理的・空間的に工夫を凝らす所が不十分ながら増えてきてはいる。

しかし、マイノリティに対しては存在を無視しているところがある。

自分自身の経験でいえば、イレウスになり、救急受診した時、電動車椅子で検査から検査へと回され、その間に4回も「立てますか？」と聞かれた。

はっきりと見える事柄についてでさえこんな現状であるから、LGBTのように見えない事柄については況や緒やである。

鑑別診断と同じでLGBTが頭になれば、患者さんからの訴えがない時には考えにも及ばない。それでは配慮や工夫のしようもない。今回の講義を聴けた医療従事者は幸運である。LGBTの方々の医療場面における様々な困り感が具体的に例示され、印象深く記憶に残った。気が付きさえすれば、後はご本人が事実関係を話し易く出来る様に配慮が行える。

いわれなき幾度もの傷を重ね、恐怖さえ味わった方々は隠し通す事が唯一の身を守る手段になる事もある。セクシャリティについては、宗教の問題も含め、歴史上、社会制度上、あまりにも湾曲し歪められたものが肥大化しているのは確かである。

ごく単純化すれば、医療は病気が治癒するのを手助けし、人を苦痛から解放する為の行為である。社会通念上の観念がそれを妨げるのであれば、さっぱりと切り捨て、囚われない

事から医療の倫理は出発すべきではないかと考えた。